

トヨックス製採用拡大

感染症リスク減で需要

産業用ホースメーカーのトヨックス(黒部市前沢、中西孝夫社長)が開発した人工透析用ホースと継ぎ手を採用する医療機関が増えている。透析患者の死因で最も多い感染症のリスクを他社製より低減できるとして、透析室を持つ国内の病院の3割が導入した。6年後に国内シェア1位を目指す。

(飯田章太郎)

治療病院の3割導入

腎不全患者への透析治療では、透析液を循環させることで血液中の老廃物や余分な水分を取り除く。一般的に、院内の機械室からホースを使って各病室に透析液を送っている。ホースは、狭い場所や柱周りのコーナーで折れ曲がることを防ぐため継ぎ手を使っている。ただ、継ぎ手の接続部分にさびや異物がたまること細菌が繁殖し、患者が感染症にかかる恐れがある。日本透析医学会の調査によると、慢性透析患者の死亡原因(2023年)の1位は感染症だった。



透析装置に接続したトヨックス製ホース



トヨックス製ホースを導入した透析室—石川県内の病院

トヨックスが19年に市場投入した人工透析用ホースと継ぎ手の最大の特長は安全性だ。継ぎ手内部にある筒状の部品「スリーブ」がホースを抑えることで接続部分の段差を少なくし、細菌や汚れが付着しにくくした。素材にはフッ素樹脂と別の樹脂との積層構造を採用。菌が付きにくく、曲げにも強い柔軟な特性を持つ。

迅速さと正確さが求められる透析機器の入れ替え作業の効率化も実現した。バンドでホースを締め付ける従来の工法では、バンドの位置や締める力の大ききによって仕上がりにばらつき

が生じ、治療中の液漏れやホース抜けの原因になっていた。トヨックス製の継ぎ手はネットで締め付ける構造で、個人差が出ないようにした。施工時間も従来の5分の1程度と大幅に短縮した。20年ごろから国内の主な透析機器メーカー3社がトヨックスのホースを採用したことで、シェアが急拡大。透析室を持つ国内の病院約4300棟のうち、3割程度が導入している。

トヨックスは24年12月、産業技術の振興に顕著な業績を挙げた企業や研究者をたたえる中部科学技術センター奨励賞を受賞した。透析の安全性を高めたことや施工時間の短縮などが評価された。今後、透析やバイオ医薬品分野を中心に販売を広げ、売上高に占める比率を現時点の2%から6〜7%に増やしたい考えだ。透析用ホースを開発した商品開発部テクニカルサポートグループの沼田健一課長は「患者の健康維持に貢献していきたい」と話す。

とやま経済